

柳宗悦著「柳宗悦随筆集」岩波文庫、岩波書店 1996年1月16日刊を読む

言葉の躰

1. 嘆かわしいことの一つは、近来美しい言葉遣いをなかなか聞けなくなったことである。特に女の
人たちにそれが目立ち、耳ざわりになることが多い。それというのも、家庭で言葉の躰がなくな
ったからである。これは、だんだん社会に礼節が廃れてきたからによる。
2. 私は小学科の1年から高等学科3年を卒業するまで15ヶ年も学習院の生徒だった。この学校は
皇族や華族が多く、当時は「皇室の藩屏」を以て任じていた。こういう点は時代の風潮で、封建制
度の名残であるが、しかし公平に見てこの頃のように何もかも封建制度が悪いようにするのは行過
ぎである。学習院を内側から知ってる身は、いろいろとそこに弱味があるのを今も思い浮べるが、
同時によかったと思う点もいろいろある。品位というような性質は決して軽蔑すべきものではない。
そこではしばしば丁寧なよい言葉が聞かれた。
3. 学習院にいて非常に目立ったことの一つは、他の学校から転入してくる学生があると、その学生
の言葉がひどく違うのにいつもおどろかされた。とても汚くて粗末なのである。そこには田舎の
人の荒けずりな素朴な言葉の美しささえないと思った。私がここで品というのは何も、きどった、
しゃれたものでもなく、また銜った術語を並べるものでもなく、また高ぶったすました言葉でもな
い。品格を重んずる伝統の中から、自から育まれてくる言葉遣いである。品位は下品、野卑な
などの反律であるから、一種の道徳的な位だともいえる。お互の言葉にそういう礼節をかわしたい求
めが心の裏にあるのである。ここで礼節というのとは他人の人格と自分の人格とを傷つけないよう
にすることである。つまりお互に相手を粗末に扱わないことである。それ故、自分をも粗末に扱わな
いのである。悪い場合は虚飾に落ちるであろうが、良い場合はこれが逆に人格を築いてくる。
4. おそらく今の多くの人たちは、品位などは封建制の遺物にすぎぬと、その価値を蔑むであろう
が、しかし礼節の徳は民主主義時代になっても重んぜられてよい。言葉が野卑に流れることは、ど
んな時代にも自慢にはならぬ。
5. 私がまだ学生だった時分は、英国人の英語と米国人の英語と、どこが違うのか、よく分りかねた
が、英米に渡ってみて、あまりにも違うのにおどろかされた。何としても米語より英語の方が品位
があるのである。米語にも率直な飾らないよい点はあるが、悪い面はとても野卑で、これを聞く英
国人が顔を顰めているのを何度も見た。欧州人は全体として米国人を良くいわぬが、それは米国人
が用いる言葉遣いや音に原因することが大きい。言葉がどんなに人格を反映するか知れぬ。もし英
国人が英語を捨てて、米語に替えたとするなら、英国気質はたちまちなくなるであろう。私が米国
にいた時、ハーバード大学で、バートランド・ラッセルの講演を聞いたことがある。あの英国の哲
学者はなかなか頭の鋭い人であるが、その講演は眼が覚めるほどの生粋の英語で、米国でそれを聞

くのでよけい目立った。その品位ある言い廻しや音の美しさに大変打たれた。人格が言葉を生むともいえるが、言葉はまた人格を変える。米語も今のままではおるまい。文化が高まるにつれ、言葉にはもっと品位が求められてくるであろう。

6. 志賀直哉しがなおやのことは、ずいぶん大勢の人が書くが、奥さんの康子さんのことは誰も書かぬから引合いに出すことにする。私の知っている範囲で、一番美しい品のある日本語を不断遣いにしている女の人の一人は康子さんである。おそらく康子さんは悪い言葉、野卑な言葉を使うことを知らないのである。それほど両親や親類から良い言葉の躰を受けてきたのだと思われる。もともと生れが公家の家柄だから自然そうなので、別に珍しいことでないかも知れぬが、その言葉遣いが康子さんの性格にまで沁み込んでいるのである。それだからこそあのわがままを自認している志賀の一家を丸く納めているのだと思われる。志賀の小説には奥さんのことが沢山出てくるが、どんな場合でも、好意のある気持ちのよい描写である。一家にばかりではない。奥さんの礼節のある言葉遣いが、どんなに多くの客に良い感じを与えているか分らぬ。たとえ志賀に反感を持つ人があったとしても、奥さんに反感を持ったような客はおそらく一人もあるまい。それはいろいろ理由もあるだろうが、一つには小さい時から躰られた美しい日本語の賜物たまものなのである。

7. そんな品位などは前代の遺物だという人があるかも知れぬが、それなら最も尊敬すべき遺物だといってよい。品位は礼節の徳で、民主時代になったら一層この徳が守られてよい。日本の言葉遣いがどうなるかは、将来の両親たちの大きな責任である。子供たちは躰で右にも左にも行けるのである。

P144 ~ 147

<コメント>

躰(しつけ)には2つの意味があると考えます。その1つは「美しい立居振舞い(たちいふるまい)」、もう1つは「敬語表現を含む言葉遣い」、具体的には「美しい言葉遣い(ことばづかい)」だと考えます。「美しい言葉遣い」が人としての躰として大切なことを、この柳宗悦先生の文章はよく教えてくださる。「躰」としての「美しい言葉遣い」の大切さを、年の始めに是非お考えください。

— 2018年1月1日(月) 林明夫 —